

吉備国際大学教授
臼井 洋輔

(はじめに)

稟^{りん}とした優雅さにおいて撫川うちわをしのぐものは全国にない。長めの柄をもつ撫川うちわから送られる手作りの涼風は、肌に伝わるやさしさまでちがう。人は暑いと風で体を冷やそうとする。人は暑いと涼しい風を恋しく思う。扇風機を回す人もいれば、浴衣を着てうちわで物思いながら自在の涼を起こすひともいる。扇風機は今日3000円でも売っている。ところが13000円の撫川うちわを買っていく人もいる。うちわが13000円で電気扇風機が3000円ですよ。昔はきっと団扇に比べれば電気扇風機の方が贅沢であったはずである。これが心の豊かさというもの。無くならないものが、贅肉をそぎ落とされて美しく磨かれて残っていったとき、本当の伝統文化になっていくのではなかろうか。こうした使う側の心と、作り続けている凛とした心が文化の伝達の主役であるような気がする。撫川うちわの作り方から、文化について、日本について、日本の明日について考えてみよう。

(おもな内容)

再生

撫川は戸川藩の小さな城下町。今も一軒だけ武家屋敷が残っている。武士の内職で始められたという撫川うちわは今ここで作られている。

歴史は300年もさかのぼり、参勤交代の西国大名の目にもとまったこの撫川うちわは、一時途絶えていたが、先代の坂野定香さんの手で伝統的な美しさが見事によみがえり、今は息子の定和(81歳)さんがその伝統を絶やすことなく引き継いでいる。

稟^{りん}とした優雅さにおいて撫川うちわをしのぐものは全国にない。長めの柄をもつ撫川うちわから送られる手作りの涼風は、肌に伝わるやさしさまでちがう。

品格とその秘密と制作手順

その秘密は確かに手間ひまをかけた製作技法にもある。節^{ふし}をはさんで50疋ほどに女竹を切り、柄にする下の部分は管のまま、節から上で64本の骨を作る。さらにその骨は、ナイフで切り口を入れたあとは指先で裂くようにそっと割って、さらに細く薄く削っていく。ナイフで割らないで指で裂くのは何故か。正確に二分するには右と左の指の力の入れ加減で、割った骨の幅が刃物するよりはるかに正確に一定になるからである。一本ムラが出来ても全ての労力は無駄になる。

さらに「^{つばぜ}鐺攻め」といって、刀の^{ふち}鐺の縁を使って、編み上がった骨の^{かなめ}要の部分を押さえつけ、弾性にしなやかさをつける。ここに武士の内職であったおもかげも残っている。

さらにこのうちわの大きな特徴は「歌継ぎ」にある。俳句の文字にそって和紙を切り抜いて重ね継ぎし、その透かし効果によって図柄に合った歌が雲形に浮かび、詠めるようになっている。

さらにその歌に合った花鳥風月の切り絵をはさみ、切り抜きの透かしも必ずどこかに入れる。その切り抜いた透かしの部分には、表裏から薄い色和紙を貼っておく。

その手間ひまのかけ具合は、他のうちわとは比較にならないもので、一本仕上げるのに、ゆうに20時間はかかる。

64本の骨も一本一本同じ太さで、等間隔に仕上げられているので、柄を下にしてそつと机の上に立ててみれば、背丈の高いうちわも背筋を伸ばした武士のようにまっすぐピタリと立つ。そのバランスの良さも他を寄せ付けない。

しかし涼しさの最大の秘密は実は洒落にある。一本が12000円程もする撫川うちわは扇風機より高く、うちわのロールスロイスであると言って良い。

クーラーや、扇風機が無くても撫川うちわはさりげなく置くだけで、涼を誘う力がある。

天正10年(1582)4月3日に信長によって慕う百人の僧と共に焼き討ちされた臨濟宗甲州恵林寺の^{かいぜん}快川紹喜和尚は「心頭滅却すれば火もまた涼し」と言っただけ平然と火の中で死んでいったと言われている。火でさえ涼しいと名僧はいうが、せめて現代人もうちわが扇風機に勝ることくらいの発想体験が時にはあってもよい。

名車は品格ある人が作らせる

ヨーロッパに目を向けると、イギリスにはロールスロイス、モーガン、ジャガー、ドイツにはベンツ、メッサースシュミット、ポルシェ、フランスにはルノーキャラベル、イタリアにはアルファロメオやカウンタック・ランボルギーニといった名車がずらりとあるのに、クルマ造りにもう97年(2003年現在)を費やしているクルマ大国日本にそれが無いのは何故だろうか。車大国米国にも無い。ちなみに世界初はカール・ベンツ、ダイムラー・ベンツが1886年であり、日本初は1907年に内山駒之助が国産初のガソリン車を作っている。決して遅いわけではない。

カメラではニコン、キャノン等の日本勢が世界のトップだと私だって思いたいですが、世界のプロカメラマンが使っているのは、ライカ、ハッセルブラッド、コンタックス、ローライ、ジナー、リンホフ、(カールツァイス) カルダンで、レンズはほとんどが外国製である。例えば光は単にガラスのレンズを透過するだけで光質はどれも同じと思っているかも知れないが、ヨーロッパのカメラと日本のカメラでは色も描写モードも明らかに違うのである。米国にも高級カメラはない。せいぜいポラロイドカメラくらいである。これも昨年倒産した。

刃物の国の日本の医療メスも値段も手頃でなかなか良いが、腕利きの外科医が絶対に信頼するのはスウェーデン製のメスであるのは何故であろうか。またピアノのパンフレットを見ても、スタインウェイのピアノが一台ずつ手で作った点を強調しているのに対して、日本のは置いた部屋の雰囲気や幸せ色にすることを強調しているのは何故であろうか。確かに日本のこうしたものは値段と機能のリンク性では群を抜いている。これは「そこそこ良

い」の範疇である。

日本に名車が生まれえないのは、作らせ求める側の品格の問題もあるかも知れない。交差点での空缶やタバコの吸殻のまとめ捨てを見れば、この国に名車はまだまだ生まれるはずがないと言えれば誰もが納得するだろう。やはり何時の時代でも、モノはその時代の思想そのものである。撫川うちわはそのことを気付かせてくれるおしゃれでユーモアたっぷりの岡山の生んだ文化である。こういう類たくいのものとそれを愛でる人がもっと世の中に増えてくれれば、効率主義の文化に風穴が開けられると思う。